

満州生まれの引揚体験記

愛知県 日 高 修 吾

一 私の少年期と父の仕事

私は昭和七（一九三二）年十月六日満州四平で生まれました。家族は父母と弟の四大家族で、昭和二十一年七月引き揚げるまで四平に住んでいました。父は明治二十九（一八九六）年、母は明治三十年生まれで、共に宮崎県国富町の出身です。父はこの町の古い商家に生まれ、二十一才まで宮崎市で働いていましたが、満州で仕事をしている勤め先の親戚の勧めで大正五年渡満し、長春の特産物輸出会社に入社しました。父の会社は、北満で生産した穀類を集荷精穀し、大連から日本に輸出していました。当時の満州はまだ治安が悪く、買付け交渉で北満各地に出張するときには、危険と遭遇することもたびたびあったようです。

大正末、父は穀物の集荷地である四平に転勤しまし

た。四平は長春の南百五十キロメートルに位置し、満鉄の平斉線と平梅線が連京線（大連〜新京）と交差する地点に当たっており、北満のチチハル方面と東満の梅河口方面からの穀物の一大集荷地でした。当時四平駅のすぐ東側は、広い穀物集荷場となってサイロが林立しておりました。従って、四平には糧棧（リヤンザン）と言っていた穀物精穀工場が集中しており、父は長春の本店から四平の責任者となり、糧棧で精穀した穀物を満鉄で大連へ輸送し、日本の神戸や名古屋へ輸出する仕事をしていました。

私の家族は、父母、弟、会社の中国人とお手伝いの姑娘を加えた六人でした。実は私の兄弟は六人いましたが、上の兄弟三人は四平の寒い気候に慣れず小学校入学前に他界。もう一人の姉は、祖父母のいる暖かい宮崎に預けられて育ったのですが、運悪く伝染病で亡くなりました。従って私と弟の二人が残り、引揚まで四平に住んでいました。父は、渡満後長春の外国語学校で中国語とロシア語を学び、私が物心ついたころには中国服を着て流暢な中国語で仕事をしていました。

また、親しくしていた白系ロシア人のカルパサ店の肥ったマダム一家は、よく家に来て父とロシア語で交歓していました。

昭和十年代に入り、父は四平で長く食糧輸出の仕事をしてきた関係で、統制となつた日本人の食糧管理の方も任せられ大変多忙でしたので、子供の私は、父の本来の日中合弁の仕事のことを詳しく知りませんでした。しかし、毎日仕事で出入りし、盆や正月には必ず家族一緒に食事をするなど、中国人との接触を通じて、私は父が四平の古い商人たちと大変仲が良く、信頼関係を築いていることを知っていました。父母は、使用人の家庭にも援助していたようで、貧しい地区から来ているお手伝いの十五、六才の姑娘は、家に帰ると必ず私と弟が大好きな水餃子をたくさん作ってきて喜ばせたり、また近所に住む鮮系の貧しい家庭の子供たちには、冬の寒さが厳しいので私や弟が幼時に着た洋服や外套をあげたりしていましたが、いつも汚れた鮮衣のオモニたちが、貧しい中にも自分で漬けたキムチを母に届けているのをよく見かけました。私たちは満州の

日本人、特に軍人や役所の人たちが抱いていた中国、朝鮮の人々に対する優越的な蔑視感情は湧きませんでした。

二 小学校時代

私は昭和十三年四平小学校の付属幼稚園に入り、昭和十四年小学校に入学しました。四平小学校は、明治四十三年に設立された南満州鉄道株式会社立の公主嶺尋常高等小学校四平街分教場であり、これが大正五年四平街尋常高等小学校となり、昭和十六年四平在満国民学校となりました。私が入学した当時は全校二十学級あり、生徒数は千人だつたと思いますが、戦争の拡大、満州開拓、資源開発などの進展に伴つて人の移動が激しく、小学校も千人を越すマンモス校となりました。学校の環境は良く、冬はスチームが完備、トイレは水洗で、水道の水も郊外の水源地で浄化されていたので、口をつけて飲んでいました。

昭和十八年に入ると、南方戦線への部隊の移動が激しく、比較的静かな街だつた四平も軍人が増え、南郊外に戦車隊と戦車学校が来たこと及び北郊外の飛行場

が特攻隊の訓練基地になり、まさに重要な軍都となりました。このように、平和でした四平も戦時の雰囲気が変わってきました。小学校時代で強い印象が残っていることを、以下に述べます。

・ノモンハン事件（昭和十四年）の戦死者遺骨列車が事件終結後のある時期、毎月十五日四平駅を通過するのを見送ったこと。

・紀元二千六百年記念行事で、満州国皇帝が日本天皇を表敬、帰途四平駅に迎えたこと。

・昭和十六年大東亜戦争が勃発したこと。

・昭和十七年大東亜博覧会が新京で開催され、全校生徒が見学に行ったこと。

・昭和十七年四平の南郊外に戦車隊、戦車学校が創設されたこと。部隊の運動会に小学生も参加し、訓練時に小学校前で見学させてもらったこと。（この隊には作家司馬遼太郎氏が少尉で来ておられた）

・昭和十九年ころから教師が召集され始め、大半が女性教師になったこと。

・四平の北郊外の飛行隊に行き、訓練中の少年航空兵

と交流したこと。

・昭和二十年、特攻隊員が訓練開始したこと。彼らは国民学校に宿営していた。

以上のように、終戦前の四平は軍都となり、市内は南方戦線に移動する部隊が集結していましたが、兵士の左腕と胸には日の丸を貼り付け、悲壮感が漂っていました。（余談ですが、近年イラク等に派遣される自衛隊員が、やはり帽子と胸に日の丸を貼り付けた姿をTVで見て、当時兵士が次々全滅する南方に戦死覚悟で行った緊迫情景を思い出し、再び戦死者が出なければ良いが、と心配します）

三 四平中学校入学から終戦まで

昭和二十年四月、私は四平中学校に入学しました。

当時三年と二年のクラスは、近郊の開拓団に動員中でした。四平中学校は、まるで軍隊の学校のようにでした。朝は上級生の引率で登校し、校門と校庭に生徒の歩哨が立っていました。学級の呼び方も軍隊式で、級を小隊、班を分隊、先生を教官殿、校長先生を隊長殿と呼び、私は入学時に「第一学年第一小隊第一分隊長

を命ず」という紙をもらい、いつも号令を掛けていました。朝礼は上級生の号令で進め、隊長殿の訓示の後一暗記した軍人勅諭を毎朝一節ずつ唱えました。授業は英語、数学等一般科目のほか配属将校の教練、電電公社員の軍用略数字の通信実習及び日帰りで飛行隊の動員がありました。授業の終わりにはクラスごとに「海ゆかば」を歌いました。厳しい教育でしたが、先生方の心に通じる温かさが身にしみて残っています。特に数学の河合先生、英語の藤本先生、国語の原川先生をよく思い出します。河合先生は、後述しますが戦後我々生徒のため勇敢に行動され、殉職されました。同じクラスに、二人の朝鮮小学校から入学した生徒がいました。そのうちの一人は神田といい、近所に住んでいて親しくなり、よく彼の家に行き、彼の姉さんと三人でチョッコンバッタをして遊んだり、母さんも一緒にご飯を食べたりしました。彼の家は間借りで狭く、貧しいけれど温かい家庭で、私のことを珍しがり学校生活の違いなど何でも話し合って、皆でよく笑いました。

ある日、彼と姉さんはこっそり私に「父は日本憲兵

隊に捕まって地下に留置されている」と悲しそうに話すのを聞き、驚きました。彼の父は朝鮮独立運動家でした。しかし、そんなことは気にせず彼の家に行き、生活習慣の違いや朝鮮小学校の話など興味深く聞いていました。当時の彼ら親子の心は、憲兵隊で拷問を受けている父を思い、日本帝国を恨んですごい苦悩の日々だったと考えると、暗い日々の家庭に私が入り込み、雰囲気を明るくすることができたように思い、一緒に過ごす時間が作れて良かったと思いました。特に私に優しくかった姉さんが、私が行くととても喜んでいた事情が分かり、少し悲しく強い印象で残っています。神田君の近くで開業している高文龍先生は、父の親友で家の主治医でした。私は小さいときから毎年高熱で死にかけ、高先生の笑顔で治っていたそうです。少年時代最も尊敬する人物でしたが、戦後朝鮮独立運動の指導者と知りました。

飛行隊での作業は、飛行場の倉庫にある細かい資機材を防空壕に移動する仕事でしたが、毎日特攻隊の訓練を見ながら緊張してやりました。隊員から話しかけ

られたこともありましたが、厳しい軍人という感じがしなかったのは、後で知ったのですが、学徒出陣の方々だったからなのでしょう。この隊は五月六日機体を黒く塗り、四平の上空をバンクしながら南の方へ飛び去りました。満州で訓練した特攻隊のことは、苗村七郎著「万世特攻隊員の遺言」に詳しく記述されています。

彼らは、五月二十八日鹿児島県の知覧基地から第四百三十二振武隊第二破邪隊（隊長舟橋卓次少尉、早大理工出身）として沖縄に出撃し、散華しました。この出撃は満州日日新聞で報道されました。

六月、四平中学校から海軍飛行予科練に入隊する先輩を、四平駅で見送りました。到着した列車にはハルピン、新京方面から入隊する中学生がぎっしり乗っておりました。ホームでは、入隊を見送る家族が涙を流して目の丸を振っていたのが、瞼に浮かびます。私も、そのころ陸軍幼年学校の受験準備をしていました。

八月八日、ソ連は日本に宣戦布告。国境では戦闘状況に入り、ソ連軍機動部隊が四平に近接して来たとのうわさが流れました。関東軍は既に撤退、家族もいち

早く避難し、八月十三日早朝警察官の家族は大挙して通化方面に避難しました。北郊外の軍や气象台官舎の友人たちは既にいなくなつたので、朝鮮に向けて退去したと思われました。そのような状況下で、一般市民は取り残される不安動揺がありました。私の父たちなど長く四平に住んでいる者や満鉄、学校関係、会社商店等の民間人は、落ち着いて動きませんでした。そのころ、私は小学校の近くの憲兵隊官舎で家族が避難した跡の空家が略奪され、床をはがされ窓ガラスが割られた上、周辺には住人の書籍やガラクタが散乱しているのを見ました。そのとき、官舎の前を何台ものトラックが軍人に乗せ、ソ連軍侵攻と反対方向に走って行くのを見て、中国人はきつと日本軍が退去し始めたように感じていると思います。これまで軍の力で安定していた市内がどんどん荒らされる予感がして、少し不安になりました。そのころ、父と長く仕事をしていた会社の中国人幹部が家に来て、私たち一家に満州に残ってどうか、一緒に仕事をやるう、子供の教育は面倒をみるからと提案しましたが、父母は子供の教育は日本

でやりたいからと、断りました。

四 終戦からソ連軍占領まで

八月十五日終戦になり、省公署、市公署には中華民國国旗の青天白日旗が揚げられ、為政者は交替しました。私たちは十八日、中学校に召集され、しばらく授業は中止。連絡あるまで待機せよとの指示を受けました。校庭は、宿舎に使っていた兵隊の小銃等武器が山積みされ、たくさんの書類を焼却していました。数日して、北満及び東満地区から開拓団の疎開者が、連日陸続きとして四平に雪崩込んで来ました。開拓団の婦女子と老人の疎開者は、裸同然で裸足で何も持たずに歩いて来ました。父たちは居留民会として早速収容を始めましたが、到着後すぐ亡くなる方も出て、家の近くの青年学校に埋葬されました。同時期に、満州開拓義勇軍の青年たちも次々と避難して来まして、皆一度私の家に来て、父に逃避行の惨状を報告していました。一部の隊員たちは、なぜか四平の中国警察に捕まって留置されていたのを、父が「彼らは軍人ではない」ことを証明して、釈放してもらったこともありました。

この数日の間に、四平青年学校の庭は、全部避難者の遺体を埋葬した、土盛りの哀れなお墓で埋まってしまいました。父は、終戦まで四平市の統制食糧の管理をしていました関係で、私の屋敷の一部に食糧保管の大きな倉庫が空いていましたので、父とコンクリート床に古い板箱をばらして敷き、三十人ぐらいの母子避難家族を収容しました。しかし、中国人警察官がときどき侵入して非難婦人たちに近づこうとするので、父はその都度中国語で説得してことなきを得ていましたが、やはり被害を受けては大変と思いい、戦前から面倒をみていた中国人青年で警察官になっている者を連れて来て、私の家の別棟に住まわせ、ときには母が彼の食事を作ってやるなどして、避難婦人たちの安全は確保できました。私の母も懸命に避難家族の弱った方々や、子供たちの生活の面倒を見て励ましておりますうちに、皆が元気になり明るくなつて、最後に一緒に引揚げることができました。

それから開拓団の避難家族以外に、父の古い友人で四平の南の・牛哨から疎開して来た一家六人、北四条

通りの義和厚百貨店の日本人店員親子三人及び東満で警察官をしていて避難して来た同郷の方の計十人を、私の家の使用人が住んでいた別棟に住んでもらいました。引揚までこの大所帯で生活しましたが、父のお陰で食糧も確保でき、中国人警察官もいたため、中共軍が占領した一カ月以外は、危険なことは起きなくて一緒に引揚げました。

この時期に、私は民間人家庭の中学生として多くの疑問を感じておりました。それは、満州国の邦人を保護するためにいた関東軍や満州国政府機関が、民間人を棄てて自分たちだけが列車で退却したこと、関東軍特に憲兵隊家族のものが速く速い朝鮮への逃亡、八月十三日までの政府機関家族の朝鮮行き列車運行、八月十三日以後の通過避難列車運行を一般市民のしている前で最優先で走らせたこと、ということですが。その結果が、どんな状況を生じさせるかを考えなかったのか、日本政府が国を挙げて「鉦や太鼓」で渡満させた開拓団員が、悲惨な棄民となることを想定しなかったのか、軍や政府の大きな組織に守られた家族たちの逃亡の前

に、まず開拓団員を避難させなければならなかったのではないかと。この疑問が今になっても解けません。

話は飛びますが、私は昭和五十七年日中両国政府間の技術協力開始と同時に、中国黒龍江省三江平原（開拓団が集中した地域）の農業開発協力に日本政府 JICA の専門家として調査団員に加わり、黒龍江省宝清県の万金山開拓団、龍頭橋青年義勇軍（トーチカが現存）の跡地でダム計画を策定しました。現地調査の過程で、朝鮮系中国人からソ連軍参戦後、義勇軍隊員の全員戦死、婦女子老人の徒歩避難、ソ連兵の銃撃、現地中国人の反乱、略奪、強姦の悲劇で半数以上が亡くなり、生き残った団員家族は四平、奉天（瀋陽）などにたどり着き、収容されたことを聞きました。私たちは、この地域に残された開拓団が造った小規模な灌漑施設を整備拡大して、大きな生産基地を造成する中国政府の事業に協力したわけです。また、万金山開拓団に近い黒龍江省密山県開拓団地区の調査においても、日ソ国境要地の密山駅では、ソ連軍侵入時に関東軍関係者は慌てて避難列車を仕立て逃亡し、開拓団員は置き去

りにされたことをはっきり聞きました。また、その日密山駅で大爆発が発生し、多くの犠牲者がでたということも聞きました。避難列車に乗せてもらえなかった開拓団員と家族は、ソ連軍に追われながら南滿に向かつて徒歩で避難を開始しましたが、上述のような悲惨な目に遭遇され、四平、奉天などに收容されました。また話は飛びますが、昭和五十年〜五十四年の間、私は木曾川最上流の長野県木祖村で水資源開発公団の大型ダム計画を策定しましたが、この村は昭和十七年国と県からの強制で長野県宝泉開拓団を結成し、当時の木祖村長が団長として黒龍江省北安県に約六百人入植しました。ソ連参戦後、団員と家族は徒歩でハルビンに避難中、約三百人がソ連軍、中国暴民に虐殺され、残りがやつと奉天までたどり着いて引き揚げたのです。私たち現地入りしてダム計画の協力をお願いしたところ、真っ先に村長から「日本国政府の言うことは二度と聞かない。お前たちは帰れ！開拓団で騙され、三百人が殺された」と、強烈に反対されました。ダム対策の委員は全員開拓団の生き残りで、何十回と行った

ダムの会議の後は、必ず行方不明団員の消息や亡くなった方の追憶で、全員が毎回泣きました。当時村では、開拓団受難の記録を作成中で、私も読まされましたが、涙が出て読むのに苦労しました。村役場前に受難碑が建っております。

五 ソ連軍の四平進駐

昭和二十年八月二十三日、ソ連軍の第一陣が四平に進駐して来ました。どんよりした天気の日でしたが、銃声も何もなく静かに昭平橋（新京方面から四平市内に入る鉄道橋）を行進して来ました。四平市政府の指示で、日本人の家の玄関にはソ連国旗を掲げました。日本人も中国人も皆、昭平橋通りの両側に並んで待っていましたら、姿が見えないのに昭平橋の方から二部合唱の歌声が聞こえてきて、ソ連兵が四列縦隊で整然と行進して来たのに驚きました。私たちは、進駐するソ連兵が、ドイツ戦場から転戦して来た野蛮な囚人兵と聞いていたからです。ソ連軍兵の顔も服装も汚れてみすばらしく、マンドリンと言われた自動小銃を肩にかけていたのが不気味でした。午後、ソ連兵約四百

人が四平中学校に到着。校舎に宿営したため、生徒は校舎に近づかないよう指示されました。その夜以後、ソ連兵は市内各所に出没し、強盗、略奪、暴行などが発生しましたが、八月三十一日近郊の楊木林の旧日本軍兵舎に移動したので、兵士の暴行も少なくなりましたが、列車で通過する部隊が、停車中に駅付近の家に行き掛けの駄賃にと振舞う略奪は減らなかつたようです。その後、正規の服装をした将校や女性兵士も見られるようになり、治安はやや落ち着きました。

六 四平中学校の再開

ソ連軍進駐後の治安悪化を恐れ、緊張して毎日生活していた市民にとって一番良かったことは、終戦以来閉校していた学校をソ連軍が再開させてくれたことです。そのため、全満州の中で四平だけが小学校、中学校、女学校の二学期、三学期の授業が行われ、終戦直前に特権で逃げに行った軍・憲兵・国機関家庭の生徒以外は授業を受け、引揚げ時に正式な終了証書を発行してもらいました。これは、ひとえに国機関の逃避者たちと行動を共にせず、四平に残留された四平中学校、

四平高等女学校及び四平国民学校の三校長が、ご自分の家族の生活をさて置き、学校再開のためソ連軍と何回も交渉して下さったお陰なのです。またソ連軍幹部の中に、樺太（終戦まで日本国）に四年住んでいた、日本語のできる将校レオーニードフ大尉がいた好運があったことと、四平中学の高室校長との間に意思疎通と信頼関係ができましたことが、大きな要因でした。

四平中学再開については、実際私が体験した記憶を中心に紹介しますが、再開に当たったソ連軍との行政的な折衝と学校運営記録などは高室校長が四平中学・四平高女同窓会誌総集編（平成七年）に記録された報告文に基づいてまとめました。高室校長は、これからの祖国再建を担う青少年の教育は、この混乱期においても揺るがせにできない、その上家庭の不安を除き四平市民に精神的安定を与えるためには、学校を再開し授業を始めて、生徒、児童を安全に通学させるのが最も早道だと確信し、ソ連軍の四平進駐に特別任務を帯びて滞在していたレオーニードフ大尉と会話し、日本人学校の再開と国民学校校舎の返還、通学の安全

保障を申し入れました。二回の申し入れの結果、九月二十八日レオーニードフ大尉は新京のソ連軍司令部に行き、十月二日から四平中学、四平高女の授業再開許可を伝達しました。授業は、ソ連軍が接收していた国民学校の一部を使用しました。問題は机、椅子が中国人暴動により略奪されて何もないので、油化会社（元二百三十八部隊）や青年学校に残っているものを提供してもらったほか、不足分は元陸軍病院が保管していた板材をもらって生徒各自が持参した工具と釘を使い、教師と生徒が一体で机と椅子を必要数だけ造りました。

十月二日開校しました。登校した生徒は百九十四人で、授業は午前中四時間とし、英語、数学、国語、物象、体操のほか、特筆すべきは中国語、ロシア語が加わったことでした。十月五日レオーニードフ大尉が来て、「日本再建のため大いに学べ」という話をしました。（通訳はロシア語講師梶氏）レオーニードフ大尉は開口一番日本語で「ミナサン、ロシア語ムツカシデースカー」と大声で挨拶したのを、今でもよく覚えています。大尉は、野蛮なソ連兵の中で人気抜群でした。

その後、中国の三民主義青年団という団体の幹部から、「三民主義」の思想教育がありました。中国語は、国民党軍事委員の郭文山氏が週一回授業を行いました。十月二十五日、日本人三学校の連合運動会を開催し、ソ連軍や四平市幹部も招待し、これまで緊張した日々の中で初めて笑いを取り戻しました。

十月二十六日、牡丹江星輝中学四年生三十四人と教師が白城子の満州航空機へ動員中終戦になり、四平へ疎開して来て四平中学四年に編入しました。

このように、厳しい市民生活の中で順調に学校が再開され、登下校も安全でしたが、中国人の泥棒が毎夜侵入し、せっかく生徒たちが造った机、椅子まで盗むので、先生たちは夜警をされていました。冬に入り、各教室には生徒の手でレンガストーブを造り、石炭を購入して暖房しましたが十分ではなく、外套を着て授業を受けました。二期終了時点での生徒数は二百八十八人でした。

昭和二十一年の三月一日、新年度の入学試験が実施され、中学校百人、女学校六十人が合格しました。そ

の後三月十七日、四平は中共軍に占領されてしまいました。四月十七日に中学校と女学校の卒業式を行い、国府軍進駐後の六月六日に三校の閉校式を行いました。在校生には、在学証明証を発行して頂き、引揚げ後の転校には便宜を図ってもらいました。

二月三日、終戦直後新京在住の満州国政府吏員家族たちで朝鮮へ逃げる途中終戦となり、安東で止められ、難民となっていた人たちが二千人が、四平を通過して恥ずかしそうに新京に帰って行きました。彼らは、列車を仕立てるために四十万円の賄賂を払ったと聞きました。開拓団家族や市民を置き去りにし、こっそり朝鮮に逃げた人たちは何の同情もありませんでした。憲兵隊家族で、四平からいち早く朝鮮に逃げた友人がいまして、同じように四平に戻ったけれど、官舎は既にソ連軍に取られてしまっていました。

七 中共軍四平占領、私の家に砲弾命中

三月十七日早朝、激しい銃声で目が覚め、中共軍（八路军）が四平市内に侵入し、四平の警備に当たっていた中国警察総隊（国府軍分派）との間に激しい市街戦

が始まったことを知りました。中共軍は警察総隊を追撃しながら、昭平橋を渡って市内に侵入して来ました。私の家は昭平橋通りの一本南の祝町にあり、家の北側には昭平橋通りの税務局前から祝町に抜ける幅三メートルぐらいの小路があって、中共軍に追われた警察総隊の一群はこの小路にぎっしり逃げ込みました。そのとき私は、昭平橋の方からの銃声と馬声が急に大きくなり、異様な騒音が広がってきたので祝町に面した部屋のカートンを少し空けて見ましたところ、ちょうど馬に乗って拳銃をかざした隊長が馬上に立ち、すごい形相で左右を見回し、駅の方へたくさんの騎馬隊と共に走り去るのを見ました。私は、すぐ炊事場に降りていた父母に騎馬隊を見せようと大声で呼び、父母が部屋に上がった瞬間、砲弾が炊事場の戸に命中しました。物凄い爆音がして、砲弾の破片が炊事場の戸を突き破って飛び込み、飼い犬に当たって死にました。もしあのとき私が父母を呼ばなかったら、父母は炊事場で砲弾の破片を受け、恐らく命はなかったでしょう。この砲弾は、小路に逃げ込んだ警察総隊に向けて撃つ

たのが、一メートルぐらい外れて私の家に落ちたので
す。戦闘は午前八時ごろまで続き、中共軍が昭平橋通
りと北四条通り交差点にある電々ビル屋上で、機関銃
を空に向かって撃ったのが占領の宣言でした。

銃声が無くなって外へ出て見ると、小路には数人の
警察総隊の死体と一頭の馬が倒れ、道路の氷が溶けて
真つ赤になっていました。間もなく中共軍兵士を乗せ
た元日本軍のトラックが何台も通過して行き、そのあ
と徒歩で日本の重機関銃を持った隊列が続きましたが、
全員が日本の軍服を着て三八式歩兵銃を持ち、胸に赤
い布をつけ、小銃にも赤い布を縛りつけているのに驚
きました。

その日の午後、私の家に数人の中共兵が来ました。
父が地域の世話役をしているので、また何か物品要求
と思っていましたら、何と隊長らしき兵が父に敬礼し
「私は元関東軍の機関銃中隊の鈴木大尉で、元日本兵
をたくさん連れてるので布団を提供してほしい」と
言いました。父は、早速隣組と協力して用意したよう
ですが、鈴木さんはしばらく父と話して帰りました。

先ほど見た重機関銃隊は、やはり元日本兵だったこと
が分かり、相当多くの日本兵が中共軍にいたことを知
りました。早朝私の家に命中した砲弾も、元日本軍の
擲弾筒という兵器から撃った弾丸だと分かりました。

その日は、どんよりとした裏寒い日でした。私たち市
民は、再び為政者が変わったという不安と、八路軍と
いう暗いイメージが重なり、これまで学校再開もでき
て治安も良くなっているのに大丈夫だろうか、私の父
母の命も偶然に助かったという恐怖感が去らず、市街
戦後の血が流れる悲惨な状況を見ながら、新たな心配
が湧き上がってきました。中共軍が占領して間もなく、
私の家に武装した中共兵が来て、武器があるはずだと
搜索しました。古くから住んでいる邦人は、護身のた
め拳銃を買って持っていたようでしたが、私の家には
何も無いと分かったら、兵が持っていた小銃の弾を見
せ、庭で拾ったと言いがかりをつけて父を連行して行
きました。調べる兵士の中に、昔父が面倒をみた貧
しい家の子の一人が中共軍兵士になっていて、父を即
座に解放してくれました。

八 四平中学校河合藤市先生の殉職

中共軍四平占領のどさくさに付け込んで、三月十七日以後数日間は、例によつて中国暴民の略奪が横行し、四平中学校もその禍を蒙りました。略奪の最も厳しかったのは三月十九日で、その日の早朝中学校の傭人からの急報を受け、近隣の先生方と上級生が駆けつけ略奪防止に懸命に努力しましたが、暴民は数を頼んで抵抗を続けるので危険を感じ、上級生共々職員室に引き揚げられました。このときやや遅れて家を出られた数担当の河合先生が、学校に到着されました。先生は、略奪防止に奮闘した上級生や先生方から状況を聞かれ危険だから現場に行くのを制止されたのですが、正義感の強い勇敢な河合先生は余裕を持って「ちよつと見てくる」と言われ、国民学校校舍北側の廊下に向かわれました。この場所は、職員室からは見通せない位置にあり、河合先生の姿は見えませんでした。三分ぐらいして一発の銃声が聞こえました。その場面を目撃した生徒の知らせで、職員室から先生方が現場に行き、河合先生が殉職されたことを知りました。目撃者から

は、河合先生は一人の中共兵士と向かい合つて何か話をしておられた様子でしたが、次の瞬間銃声が出て先生は倒られました。との報告でした。私の推測ですが、恐らく勇敢な河合先生は、暴民に対して略奪行為を非難され、現れた中共兵にもそのことを厳しく訴えられたと思います。私は今なお当時を思い出しますと、暴民に対しても中共兵士に対しても、怒りで体が震えます。これまで高室校長のご尽力で学校が再開され、苦しい生活の中にも平和裡に勉強ができ、特に河合先生の授業は生徒の心にしみる温かい、ときにはユーモラスな指導で楽しかったことを思い出し、残念でなりません。翌日、全校生徒が講堂に集まり、お別れ式がありました。高室校長が奥様とご家族を想う悲痛な心を切々と述べられたのを、私は今なお覚えております。当時小学校三年生でしたお嬢さんは、父上の遺志を継がれ、故郷山形県の中学校で長く教鞭をとられました。河合先生も、さぞや喜ばれたことでしょう。 合掌

九 中共軍の強制徴用

国府軍は、隠密裡に四平を包囲し、反撃の機会を狙

っていました。中共軍は、そのため四平で戦闘が行われることを予想して、陣地構築のため日本人の男性を勞工（強制労働）につかせました。中共軍は一カ月の戦闘の間、計画的に連日十八才から四十五才までの日本人男性を徴用して、最前線で働かせました。父の友人の若い満鉄社員は、内戦中連続して勞工に狩り出され、弾丸の運搬と塹壕掘りをやらされ、撤退時には連れて行かれる途中、機会をみて四平の北の河付近で脱走し、帰って来ました。また、若い女性（女学校生徒を含む）を、中共軍の従軍看護婦として強制的に参加させることを要求してきました。恐らく居留民会からの指示と思いますが、地域ごとに人数の割り当てがきまして、若い女性のいる家族は深刻な問題になりました。私の家の隣保班の割り当ては二人でした。父は対象者の家庭に相談しましたが結論がでませんでしたので、最後には私の家に集まってもらい、くじ引きで決定しました。当たった一人は、私の四平中学同級生の姉さんで、女学校三年生でした。父は引揚げ後も、晩年までくじ引きで決まった方々が無事帰国できただろ

うか、と非常に苦しんでいましたが、父の没後従軍看護婦に徴集された方々は、昭和二十八年に帰国されたことを知り、安心しました。また、四平高女在學生で徴収された方は三人おられました。四平中学高室校長が自ら中共軍司令に会い、中共軍撤退時には親元に返すことを要請し約束させましたが、約束どおり中共軍病院に徴用されていた三人は帰宅しました。

十 国府軍の反撃と中共軍の退却

三月十七日、中共軍が四平を占領して以来、国府軍は反撃の機会を狙っていましたが、四月十八日攻撃を開始し、五月十九日までの一カ月間、昼夜を分かたず激しい砲撃戦が続いて、市内は砲弾の破裂で再び防空壕を掘るなどの事態になりました。中共軍は一カ月の戦闘の間、前述のとおり日本人男性を徴用して、最前線の塹壕掘りや弾薬運搬に従事させましたので、犠牲者も多くでした。四平中学校生徒も三人負傷、四年生一人、直撃弾で即死しました。私の家の前にある製氷会社の高い煙突は、南の郊外からよく見えるらしく標的にされ、煙突の高い位置に一発、私の家のすぐ横

の小路に一発、隣家の玄関横の座敷に一発命中し大きな穴があきました。が、両家とも防空壕に避難して無事でした。煙突にも命中しているところから、うわさのように国府軍はアメリカ仕込みで射撃の腕が高いことがわかりました。中共軍は国民学校の屋上に機関銃座を設け反撃していましたが、アメリカ装備の国府軍の砲撃に勝てず、多くの死傷者を出し八面城方面に退却しました。私は北四条通りで撤退する部隊の列を見ましたが、大方の兵士は負傷しており、たくさんのだん架を担いでいました。前述しました徴用された従軍看護婦たちは、部隊と一緒に撤退したと思われませんが、四平高女生の三人は帰宅しております。塹壕掘り、弾薬運搬の労工に徴用された方々は、退却時に北の河付近で脱走し帰って来ました。

また話が飛びますが、私が平成五〇年北京に長期駐在時、日本政府が無償で造った「日中友好病院」に、四平攻防戦のとき、牡丹江高女から従軍看護婦に徴用された方が医師になって勤務されておられ、当時北京に住んだ日本人は大変お世話になりました。彼女は中

国名を葉さんといいます。国内戦後中共軍の軍医学校を出て軍医になり、中共軍軍医と結婚しています。私も家内も北京駐在の折は大変お世話になったのですが、私が四平からの引揚者だと言ったとたん驚き、早速四平攻防戦の話になり、すごく危険な弾丸の下で中共兵の看護に当たったことをたくさん話してくれました。北京で四平生まれのひと、四平攻防戦の話ができる偶然を喜んでいました。そのころ、私の同僚の専門家が心筋梗塞で倒れたとき、葉さんが一命を取り止めてくれました。葉さんは、平成十五年私が中国の仕事を終えて帰国するときも、現役で勤務されていました。

十一 国府軍占領と引揚げ開始

五月十九日攻防戦は終結し、アメリカ装備の国府軍が進駐し軍政をしましました。進駐したのは「新一軍」という完全なアメリカ装備部隊でした。市内の空気はとたんに明るくなり、市公署には青天白日旗が翻りました。ある日、国府軍の若い将校が数人、父を訪ねて来て何か相談していました。話が終わってから私が中学生と分かたら、英語で話しかけてきました。父

が言うのには、彼らは大学を出たインテリ幹部だそうです。また、居留民会の担当は日本語ができる劉中佐（参謀）と聞き、市民の気持ちは以前の中共軍政と違って前途が明るくなりました。学校再開も校長先生方が交渉されたようですが、引揚げ時期が六月ということも言われ、六月六日に三学校とも解散式を行いました。

七月一日から引揚げが開始され、毎日二〜三大隊ずつ出発し、十日で完了しております。私の一家は、父が中国語とロシア語ができるため大隊本部の涉外班に所属して乗車し、葫蘆島に向かって出発しました。途中錦県で下車し、元日本人住宅に一泊、翌日葫蘆島へ到着し、何日か船便を待ちました。宿泊地で私は発熱し父母は心配しましたが、医務班の若い満鉄の医師から注射をして頂き、元気になりました。医師の小型トランクには、大隊員の発病に備えて注射液や薬品がたくさん入れてあるのを見て、心強く思いました。乗船したのは、リバティ型貨物船でした。出航して亡くなる方の水葬も何回もあり、前述した四平で姉さんが中

共看護婦へ動員された同級生のお母さんが亡くなられました。

上陸は舞鶴でした。真青な海、濃い緑が強い印象でした。九州への車中から、広島島の惨状を見て驚きました。一家四人は両親の出身地宮崎県国富町に引き揚げ、父の実家に落ち着きました。

十二 引揚げ後の生活

父は、若いときから敗戦で引き揚げることなどは全く予想せず、満州国で仕事をやるだけやって晩年は実家へ帰り、老後を過ごすつもりでした。相続した自分の家屋敷は、親類に管理を頼んでおりましたので、引揚げ後はそこで生活を始めました。当時父は五十歳に達しており、すぐ就職することが難しいので、貸し付けてあった田畑三十アールを返還してもらい、にわか農業を始めました。不慣れた農作業を、近隣農家の協力を得て何とかやれるようになり、食糧は十分確保できました。昭和二十三年から農協に勤めて一生を終えました。父は、引揚げ直後の経済的に困難な状況だが、将来のため頑張って中学の勉強を続けよと言い、私と

弟は父の素人農業を手伝いながら、中学へ転校しました。一学年終了証を持っていましたので、遅れることなく宮崎中学二年の転校試験を受け、合格しました。弟も、終戦後の四平中学入学試験に受かっていて、在学証明証を持っていましたので、同じ宮崎中学一年に転校できました。転校してみますと、四平中学以外の満州、朝鮮、台湾の中学生は、皆一学年遅れています。内地の中学は、米軍の爆撃で校舎は全部焼け、また動員の連続で授業内容が遅れており、四平中学の方が進んでいたため、私の学年成績は上位一割に入ることができました。お陰で授業料免除となり、一番有り難かったことでした。

昭和二十三年学制改革で新制高校となり、昭和二十六年卒業後、国立大を奨学金で卒業して、国の機関の技術者に採用されました。大学時代は、将来中国と関係する仕事の希望も持っていましたので、語学は必修の英語、ドイツ語のほかに中国語を選び四年間授業を受けましたが、これが私の後半人生にすごく役立ちました。

大学卒業後、農林省が米国から資金と技術援助を受けて実施した開発事業に従事したのを始めとして、七大水系の水開発に参加しました。日中国交回復と同時に、中国政府は文革で遅れた農業水利開発技術の向上のため、日本に協力を要請してきました、昭和五十七年から中国黒龍江省三江平原農業開発を始めとして、四平市を含む各地区の調査業務に参加、平成五年～十年間は北京の中国水利省に、平成十二～十四年間は湖北省政府に長期派遣され、両国政府間のODAの業務を担当しました。帰国後は、農林水産省直属機関の(財)日本水土総合研究所で、平成十七年まで日中技術協力部門を担当しました。平成十四年十月、中国国務院から外国人専門家功労賞「友誼賞」を受賞しました。

あとがき

満州生まれ育ちの私が子供のころから見てきた、一民間人としての父の日中合弁の仕事を通じて、民族間の友好交流、平和共存がどの時代でもいかに大切なことか、ということを植え付けられました。この理想が満州国の建国理念である「五族協和、王道樂土」でし

たが、日本帝国主義の侵略政策の手段であることを知り、夢と消えてしまったことは落胆しました。しかし、私が社会人になって再び中国に関係する仕事へ向かったのは、やはり中国が生まれ故郷という淡い憧れと、父が体で教えてくれた国境を越えた人間愛を、再び大陸の地でライフワークとしたからです。幸い、子供のころから父に仕込まれた中国語を駆使して、大陸全土で技術協力の仕事が存分にできましたことは、四平中学校の故高室一彦校長先生、河合籐市先生、国民学校長島田仲先生から賜った薫陶によるものと、心から感謝致しております。最後に、この一文を書く機会を与えて頂いた「平和の礎」編集の皆様にも、厚くお礼申しあげます。